Shochiku Company at 110:
Shochiku in the History of Japanese Cinema

松竹と映画

松竹創業百十周年記念

写真：「チャップリンよなぜ泣くか」
（斉藤寅次郎監督、1932年）

2006年1月13日｜金 ― **3月26日**｜日 ＊月曜日は休室

東京国立近代美術館フィルムセンター展示室［7階］

開室時間：午前11時―午後6時30分（入場は午後6時まで）
料金：一般200円（100円）／大学生・シニア70円（40円）／高校生40円（20円）
＊料金は常設の「展覧会 映画遺産」の入場料を含みます。
＊（　）内は20名以上の団体料金です。小・中学生は無料です。
＊フィルムセンターの企画上映をご覧になった方は当日に限り、半券のご提示により団体料金が適用されます。
＊シニア（65歳以上）の方は、必ず年齢を証明できるものをご提示ください。
主催：東京国立近代美術館フィルムセンター　協力：松竹株式会社

東京国立近代美術館フィルムセンター
National Film Center
The National Museum of Modern Art, Tokyo
東京都中央区京橋3-7-6

東京国立近代美術館ホームページ
http://www.momat.go.jp/

チラシ：「マダムと女房」
（五所平之助監督、1931年）

ポスター：「カルメン故郷に帰る」
（木下恵介監督、1951年）

ポスター：「君の名は」
（大庭秀雄監督、1953-54年）

松竹百十周年

写真：蒲田撮影所

ポスター：「愛染かつら」（野村浩将監督、1938-39年）

ポスター：「東京物語」（小津安二郎監督、1953年）

ポスター：「宇宙大怪獣ギララ」（二本松嘉瑞監督、1967年）

松竹創業百十周年記念

松竹と映画

Shochiku Company at 110: Shochiku in the History of Japanese Cinema

我が国の演劇、映画史に大きな足跡を残す松竹。その創業は、社名の由来でもある白井松次郎、大谷竹次郎兄弟のうち弟竹次郎が京都・阪井座の仕打（興行主）となった明治28（1895）年12月に遡ります。一方、同じ12月にフランスではシネマトグラフが公開され、新たな発明品であった映画がいよいよ実用化に向けて動き始めていたことは奇妙な偶然であったといえるでしょう。

そして大正9（1920）年の「松竹キネマ合名社」設立によって、ついに《松竹と映画》の歴史は幕を開けました。これは、映画会社としては日活に続く我が国二番目のメジャー・プロダクションの誕生を告げるものであり、ハリウッド映画に範を仰いだ進歩的な製作システムは当時国内で高まりを見せていた映画劇革新運動とも歩調を合わせながら、歌舞伎など伝統芸能の影響を強く受けていた日本映画を新たなステージへと導くことになります。

このたび「松竹創業110周年」を記念して開催される本展覧会は、無声映画にはじまりその後もトーキーそしてカラー映画の時代へと、常に技術革新の先陣を切りながら数々の名作を世に送り出してきた松竹映画の世界を、フィルムセンターが所蔵するポスターや写真、松竹や関連機関に現存する資料の展示を通して振り返るものです。小ホールで同時開催される上映プログラム「松竹映画探索 1960－70年代」とあわせてご観覧ください。

写真：「そよかぜ」（佐々木康監督、1945年）

ポスター：「愛と希望の街」（大島渚監督、1959年）

ポスター：「男はつらいよ」（山田洋次監督、1969年）

雑誌「蒲田」「松竹」

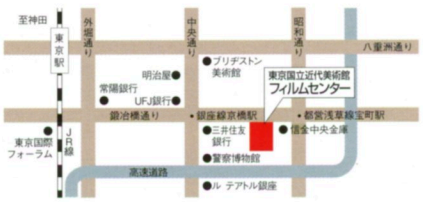
関連企画上映

松竹創業110周年記念　松竹映画探索 1960－70年代

2006年1月13日（金）—3月26日（日）※金曜日・土曜日・日曜日のみ上映

東京国立近代美術館フィルムセンター小ホール（地下1階）

東京国立近代美術館フィルムセンター
National Film Center
The National Museum of Modern Art, Tokyo

〒104-0031 東京都中央区京橋 3-7-6
お問い合わせ：ハローダイヤル 03-5777-8600
東京国立近代美術館ホームページ http://www.momat.go.jp/

▼ 交通
東京メトロ銀座線京橋駅下車、出口1から昭和通り方向へ徒歩1分
都営地下鉄浅草線宝町駅下車、出口A4から中央通り方向へ徒歩1分
東京メトロ有楽町線銀座一丁目駅下車、出口7より徒歩5分
JR東京駅下車、八重洲南口より徒歩10分